

箱庭に表現される“子どもイメージ”
——子どものケアを職務とする看護師・養護教諭を対象に——

前 川 知 香

箱庭に表現される“子どもイメージ”

—子どものケアを職務とする看護師・養護教諭を対象に—

前 川 知 香

目 次

- I. 研究史と研究背景
 - 1. 箱庭療法の研究史
 - 2. “子どもイメージ”に関連した研究
 - 3. 研究背景
- II. 目的
- III. 方法
 - 1. 予備調査
 - 2. 本調査
- IV. 結果
 - 1. インタビュー内容の分析結果
 - 2. 箱庭作品の分析結果
 - 3. 事例分析結果
- V. 考察
 - 1. インタビューから得られた“子どもイメージ”
 - 2. 箱庭作品から得られた“子どもイメージ”
 - 3. 事例を通して
- VI. 今後の課題

I. 研究史と研究背景

1. 箱庭療法の研究史

i. イメージとは

イメージという言葉は、さまざまな領域で多様な意味をもって使われており、田嶋（1992）は、その語を厳密に定義することは難しいと述べる。しかし、無意識を重要視する臨床心理学の立場においては、イメージは「『私』の体験

そのものであり、『私』以外に——『私』が表現しない限り——知りようがないのである」と河合（1991）が述べているように、無意識を含んだ個人の内界を表すものとして捉えられ、夢をはじめとする多くのイメージ表現が重視されている。厳密に言えば、イメージは、感覚器官を介して外界にも存在し、外界と内界の双方から影響を受けて存在している（河合，2018）、準知覚的存在である（田嶋，1992）。このことを、田中（2000）はユング心理学の視点から、イメージが「感覚的な知覚」と「内的な知覚」の双方に、同程度の一貫した意味を与えると述べている。つまり、人それぞれに異なった感覚的知覚体験と内的知覚体験とに影響を受けた結果、個人の主観的なイメージは体験に意味をもたらすと捉えることができるが、加えて、河合（1991）は、イメージが、自律性、具象性、集約性（多義性）、直接性、象徴性、創造性という六つの特性を備えており、これらが併存しながら極めて個人的な内的イメージに繋がっているという。中でも、イメージの自律性については、内界の奥深くから出てくるものほど自律性が高く、自我のコントロールが及ばぬところで、驚きや恐れなどの感情体験を伴いイメージは作り出される（河合，1991）。加えて、岡田（1984）は、イメージは常に動いていて、変化し続けるものであるというイメージの力動性を特徴として挙げている。

*臨床心理学研究科 博士課程（前期）

ii. 箱庭療法の特徴とそのはじまり

箱庭療法 (Sandplay Therapy) は、このような個人的・主観的なイメージを表現する方法の一つである。57×72×7 cmの底の浅い箱と、砂、ミニチュア玩具を使用して、砂箱の中に制作者が自由にミニチュアを置いていくもので、非言語的な表現を媒体とするため、子どもをはじめとする多くの人が言葉を用いずとも内界の表現が可能になるという利点がある。木村 (2019) は、箱庭療法を絵画療法と遊戯療法の中間にある、非言語的な表現療法として位置付け、遊戯療法で遊ぶには年齢が高いが、言語化の十分でない思春期のクライアントにとって効果的な自己表現の手段となると述べている。また、絵画療法との比較においては、絵を描くことに慣れていない人が抵抗なく入っていける素材であるとし、しかし、既製品であるミニチュアを使用するという点で表現可能性の限界にも触れている。

そのはじまりは、イギリスのローウェンフェルト (Lowenfeld, M.) が世界技法 (The World Technique) として発案した1929年であるとされる (河合, 1969)。小児科医であったローウェンフェルトは、子どもの治療技法として、当時イギリスで行われていた床遊び (Floor Games) を、この世界技法へ発展させた。その後1956年には、スイスでユングの教えを受けたカルフ (Kalf, D.) が、世界技法を学び、分析心理学の視点と結びつけたことで治療法としての Sandplay Therapy が登場する。日本へは1965年にカルフの教えを受けた河合隼雄が箱庭療法として導入するに至った (岡田, 1984)。奥平 (2002) によれば、日本では古来から風景を創作し、その風趣を味わう「盆景」などが盛んに行われていて、庭を持たない庶民の慰めの一つが「箱庭」という形になったという。よって、日本人に広く受け入れやすかったことが心理療法としての確立を支えているようである。

何故箱庭を置くことで治療的效果がもたらされるのか、という問いには多くの研究者によって回答を得るべく考察がなされている。田中

(2004) によれば、箱庭で自らのこころの世界を表現し、深く体験することによって、内的変容が促されるのであるが、既製のミニチュアを組み合わせることが、こころの世界のイメージを掻き立てることにつながるという。ここには既製品を箱庭内に置く「ぴったり感」というものがあると思われ、河合 (2017) が「そう簡単に何かに置き換えることができない」その人固有の表現可能性に触れていることや、東山 (1994) の述べる、自分にぴったりしたものしか置くことができない箱庭の性質と合致する。加えて、斎藤 (2002) も、アイテムが既製品だからこそぴったりくるものを想像する作業へと向かわせると述べており、箱庭の三次元の世界に、形や大きさ、数に制限のあるミニチュアを置くことが、内的イメージのぴったり感をもって深みを増していくことにつながっているといえる。このことをミニチュアを置いていくことの体験過程から考察した石原 (2015) は、感覚体験や感情体験が物理的なものへ収斂されると捉えている。河合 (1991) は、箱庭は作っているうちに自分でも思いがけない表現や発展、変更が生じ、何故そうしたのか分からないけれども、作品ができあがると内界の表現として思い当たることがあると述べ、このことは、光元 (2001) の述べる様々なレベルの無意識が「ぴったり感」の連続によって、既存のイメージではないところから沸き起こったと捉えることができる。さらに、そのようなイメージ体験は言語に置き換えることが困難なこともあり、言葉で示し得ないことを作品によってイメージとして示すとともに、作品を視覚で捉えることによって意識化が可能になり得ると岡田 (1984) は述べている。

iii. 箱庭作品の内容に関連した基礎的研究

箱庭を作品の理解から捉えようとした基礎的研究には、岡田 (1984) や木村 (2019) のものが挙げられる。岡田 (1984) は、正常群における一回限りの作品を年齢差に焦点づけて分析し、幼児から大学生までの6群における箱庭作

品の特徴を示している。また、正常群と異常群の作品を全体的な印象から分析したものでは、SD法によって、動的統合型、動的非統合可能型、硬直型、貧困型、静的統合型、積極的防衛型、の6次元を抽出しており、正常群は動的統合型が多く、異常群は積極的防衛型に多いことを示唆している。さらに、イメージを「無意識にあるものを意識化する過程で、象徴化されて現れてくる像」と定義し、本能的・衝動的なものの象徴になり得る動物のミニチュアの用いられ方を考察する目的で、動物イメージの調査を行っている。それによると、ライオン・イノシシ・トラが人格や性格を示すものとしてイメージされやすく、アリ・ライオン・シカがポジティブに、イノシシ・ブタ・トラなどがネガティブにみられやすいという。木村（2019）では、岡田（1984）の研究を引き継ぎ、年齢発達の観点から見た箱庭作品の特徴や傾向の調査が行われており、岡田（1984）に加えて、発達遅滞児・高知能児・施設児の特殊群における箱庭作品の特徴を示している。さらに、木村（2019）は、箱庭作品とロールシャッハ・テストとの関連を調査し、人玩具の使用とW%（全体反応%）、動物玩具の使用とΣCおよびCF+C反応（色彩反応分野）、植物玩具の使用とP反応（公共平凡反応）他、7項目において正の相関を見出した。その他にも、斎藤（1992）の不登校児を対象に箱庭作品の特徴を捉えようとした研究では、正常群と比較して郊外のテーマが少なく、乗り物類・建物類の玩具の使用が少ないなどの傾向を報告しており、基礎的研究は様々に積み重ねられている。しかし、箱庭は制作者から湧き起こる内界の表現を大切にする基本姿勢があるため、特定のイメージを捉える媒体としての調査はなされていないのが現状である。

2. “子どもイメージ”に関連した研究

i. 思春期青年期の“子どもイメージ”

伊藤・武藤（1987）は、中学生と高校生を対象に“子どもイメージ”を捉える質問紙調査を行い、イメージの加齢による変化、および子ど

もに対する興味や関心などがイメージに与える影響を検討している。それによると、中・高校生は子どもに「あかるい、楽しそうな、ほがらかな、あいきょうのある、生き生きした、ひとつつつこい」という明朗性因子のイメージを最も強く抱いており、この明朗性因子は学年が上がるほどプラスの方向へ高くなる。また、子どもに対する興味・関心の高い学生ほど、子どもに対して、明朗で扱いやすく、敏感で健康な、無邪気なイメージが強いという。

伊藤（2005）は上記以外にも、中・高校生の“子どもイメージ”の発達様相を明らかにする調査を行っており、この調査でも、中・高校生に共通して明朗なイメージが固定化されていることを報告している。また、「明朗性」の他、下位尺度として「素直さ」「強靭性」「社会性」という3因子を抽出しており、この3因子に関してはイメージが固定化されていない。さらに、中学生と比較し高校生の方が自我の現れるイメージが色濃くなり「強靭な」「社会的な」イメージが強くなることを示唆している。

高等学校を卒業して間もない短期女子大学生を対象にした岡野（2003a）の研究によれば、子どもに対する肯定的イメージを持つ学生が概して多い中、全体の1/4を占める否定的な“子どもイメージ”を持つ学生は、人間関係が量的にも質的にも乏しく、家族が話し合う機会が少なく、互いに分かり合っていると思っていない。また、家族に対してイライラすることが多く、将来の自分が築く家庭生活を想像することが少ないようである。さらに、厳しく指導してくれる人や温かいと感じる人が思い当たらないとする回答が多かったことを報告している。また、岡野（2003b）は同時期に、文章完成法の援用で青年期女子と幼稚園児母親の“子どもイメージ”の比較調査も行っており、青年期にある学生群は子どもを「かわいい」あるいは「うるさい」という単一側面のみ捉える傾向があるのに対して、園児母親群は子どもの持つ様々な側面について複眼的に捉えていると報告している。“子どもイメージ”を表現を介して捉えよう

とした研究には、菅原（2017）の高校生を対象にコラージュ制作を用いて行った探索的研究が挙げられる。分析の一つに、コラージュ作品のインタビュー分析があり、それによると、高校生は、子どもというのは未成熟の状態、それ故に子ども独自の世界体験や活動生の高さ、好奇心、明るさを持っている。そこへ親から受ける外的な影響要因（親から影響を受ける子どもの好み・親から受ける禁止・親から受ける加護）があり、それを受けて子どもの成長が促されていく、というイメージを報告している。また、作品の内容分析では、おもちゃの素材を使用した対象者が多かったことから、高校生が子どもの視点に立って興味のある対象を貼っている可能性を示唆し、高校生は自身の子どもの時代を想起しやすく、当時の体験を反映した結果となったのではないかと考察している。

ii. 看護科・保育科・教育科大学生の“子どもイメージ”とその変容

看護科学生を対象とした伊藤（2006）の研究によると、小児看護学履修前の学生は、子どもを肯定的にイメージする者が多い。しかし、学生は、小児看護演習を体験することにより、「大人・看護婦の目から捉えた子ども」へとイメージを変化させている（片川ら、2004）。また、小児看護学実習を経験すると、病児への関わり体験から活動性へのイメージが低くなることも明らかになっている（村上ら、2010）。さらに、村上ら（2010）は、子どもと接触が多い学生ほど「落ち着きがない、感情的な、うるさい」といった否定的なイメージを抱きやすいことに触れ、子どもの成長・発達を理解しながら、否定的イメージを含め、子どもを全体的に捉えることの重要性を唱えている。

実習前後のイメージに関連する研究は他にも、牛澤・北島（1995）が、小児病棟実習で患児とのコミュニケーションがよく取れた時や、実習が楽しかったと思えた時に「正直」「楽しい」「おもしろい」「きれい」「子どもと話したい」「一緒に遊びたい」「だっこしたい」「守っ

てあげたい」「子どもに触れたい」「好き」の10項目のイメージが強まったことを示している。また、古谷ら（1995）や、岡田（2006）も同様に、保育と看護の両科において実習を通して学生の子どものに対する肯定的なイメージは強い方向へ変化したことを報告している。このような結果に対して、内田ら（1993）は、変化した「子どものイメージは実習後に、時間が経過すると弱まり、再び子どもと接することで強くなる傾向があり、イメージの強さは変化するものの、子どもを見る見方は学生が本来持っているものが大きく、学生が成育過程の中ですでに築いてきたものもあるのではないかと考察している。

一方で、看護科と保育科の両学生を対象とした研究では、高橋ら（1994）により“子どもイメージ”と自我構造との関連性が示唆されている。イメージ調査と東大式エゴグラムの結果によれば、養育的な親（NP）得点の高い学生は、子どもをあるがままに受けとめ、保護的、養育的な役割をとろうとし、子どもへの「おもしろい、意欲的、元気がある、幸福そう、楽しそう、活発、生き生きしている、あたたかい、純粹」という“生氣イメージ”の肯定度が高くなる。また、大人（A）得点の高い学生は「鋭い、たのもし、たくましい、強い、勇敢、敏感そう、すばやい、すぐれている」という“たくましさのイメージ”が、自由な子ども（FC）得点の低い学生は「親切、素直、おだやか、人間的、あわれみ深い」という“性質のイメージ”が肯定度を増すという。岡田ら（2006）は、看護科と保育科の学生の“子どもイメージ”を比較検討し、イメージ構造の観点から、両学生共に同等のイメージ構造を有していると述べた。しかし、保育科学生の方が、子どもの性質を理想的・肯定的に捉え、子どもに対してより親しみのある感情を併せもっているようで、この差異について、「不健康な子どもを看護したいという動機から入学する看護学生の子どものイメージは、健康障害をもつ子どものイメージが先行してしまい、子どもの弱さや頼りなさ、不安定

さの印象が強くなることで、子どもの性質や子どもに対する感情の肯定度が医療保育科学生よりも低くなったと考えられる」としている。

教育学科においても、フレンドシップ事業や教育実習による“子どもイメージ”の変容を明らかにする研究がなされており、田崎・米沢(2013)は、フレンドシップ事業に参加した大学生4学年中、事業後1年生にのみ否定的な子どもイメージが上昇したことに注目している。また、三島(2007)は、教育実習後に否定的な“子どもイメージ”が上昇することを示し、教育実習で実際の子どものと関わることで、ステレオタイプ的見方ではなく現実に即して子どものありのままの姿が多面的に見られるようになったと述べている。

iii. 就業者の“子どもイメージ”とイメージ形成に及ぼす影響要因

実際に子どもと関わる就業者の“子どもイメージ”を調査しているものには林田・中(2001)があり、それによると、無認可保育所で働く保育者は、「興味ある」「かわいい」「好き」「楽しい」などの肯定的なイメージ得点が平均的に高く、子どもに対して愛情をもって接している。しかし、今後の保育所形態の変化に伴い現場の激務化が予想されることに触れ、否定的なイメージの増大可能性にも言及している。

一方で、小児看護領域で働く看護師の環境や状況が生み出した、子どもと家族への看護を阻む要因を明らかにした文献研究(山内ら, 2009)では、「看護師は、ターミナルケア、子どもの死に直面すること、交通事故に遭った子どもの悲惨な状況を目にすること、処置や援助に理解や協力が得られないこと、子どもの状況で予定を変更せざるを得ないことなど、子どもとの関わりが負担になる状況においてストレスを抱いていた。また、子どもの欲求が満たされず我慢を強いることへのストレスや治療の是非に関するジレンマ、予後に関わる責任の多さや緊張感など、子どもへの制限や治療に関する問題において様々なストレス感情を抱いていた」

とある。

看護師のバーンアウトに関する要因を調査した、本村・八代(2010)によると、バーンアウト得点が高いもののうち、労働に関するものでは、看護師の職務特徴として、仕事の負担が多いこと、高難度の技術を求められること、夜勤があることを挙げており、常に人命に関わる責任や緊張がのしかかる中で多忙な業務は、患者との時間が取れないために不全感を抱く者が多い、と述べている。

3. 研究背景

以上研究史から、イメージは個人的で主観的な外的・内的体験の上に成り立ち、個人の体験や経験などが反映されて、変化し続けるものであるということがいえる。“子どもイメージ”に関連した研究の中でも、対子どもの職業を選択する以前から抱いていたイメージは、授業・事業・実習後に変容したことを示しているものが散見される。しかし、実際に職務を行う者のイメージというのは殆ど調査がなされておらず、ストレスやジレンマを抱えることが多い現場で、どのようなイメージを抱いているのかは明らかでない。また、“子どものイメージ”を表現を介して捉えようとした研究も少なく、特に箱庭においては自由度が高いことに加え、特定のイメージを反映させる媒体ではないという基本姿勢も相まって利用されたものは見当たらなかった。よって、箱庭表現を媒介にすることにより、どのような“子どもイメージ”が現れてくるのか、探索的に調査をすることに意義があると思われる。

II. 目的

本研究では、職務的に子どものケアに携わる看護師・養護教諭の“子どもイメージ”を探索的に検討する。その際、これまでに表現を介したイメージ調査が少なく、特に自由度の高い箱庭を使用した調査はなされていないことから、本研究では箱庭を介して“子どもイメージ”の

検討を行うことを試みる。また、結果からイメージ調査における箱庭の有用性を検討する。

Ⅲ. 方法

1. 予備調査

調査の構造や進め方、ミニチュア素材の選定と分析方法を検討するために、本大学院生2名(男性1名、女性1名)に“子どもイメージ”で箱庭を制作してもらい、「どのようなものができたか」「ストーリー」「感想」「足りないと感じたもの」の4点について聞き取り調査を行った。結果として、単純に“子どもイメージ”で制作を依頼すると、職務と関係のない漠然とした“子どもイメージ”が表現される可能性が示唆されたが、職務的なジレンマやストレスを抱えながら形づくられた“子どもイメージ”の検討につながることも考えられた。また、予備調査協力が制作した作品は、ストーリーが明確な具体的な表現と、ストーリーが曖昧な抽象的な表現に分かれた。このことから、作品の説明のみでなく、そのイメージが沸き起こってきた様子を聞いていく必要性を示していると考えられた。足りないと感じたものには、綿・セロファン・粘土・ワクワクするようなミニチュアが挙げられたが、一般に流通している箱庭用具で統一した研究が行えるよう、素材の追加は行わないことにした。

2. 本調査

i. 調査協力者

本研究における調査協力者(以下、協力者)は、調査実施時に子どものケアを職務としていた、小児科勤務の看護師8名、養護教諭5名の計13名であった。性差は考慮しないが性別の内訳は女性10名、男性3名であった。また、平均年齢29歳($SD=2.13$)で、平均職務年数は7年($SD=2.40$)、平均施設数は2.6施設($SD=0.83$)であった。さらに、協力者13名中、妊娠中であった1名を除いて、子どもを持つものはいなかった。なお、協力者は、調査者の知人へ

縁故法で募り、連絡の際に調査の概要や目的、リスクなどを事前に伝えた。調査終了時には、謝礼として交通費分のQUOカードを渡した。

ii. 調査時期と場所

2019年7月～8月に、東京国際大学臨床心理センター内に設置されたプレイルームにおいて、箱庭制作および、半構造化面接を実施した。

iii. 調査材料

箱庭用具一式(細かい砂と粗い砂の砂箱2種類・ミニチュア各種)、ICレコーダー、デジタルカメラ。なお、ミニチュアのカテゴリーと種類は、河合(1969)を参考に、全協力者に対して同じ種類と数量を提示した。

iv. 調査内容

(1) 箱庭制作の説明と実施

箱庭制作方法について、2種類の砂からどちらか一方を選択してもらうこと、砂をかき分けると水の表現ができること、ミニチュアはどれでも好きなものを使用できること、時間に制限はないことを伝えた上で、「子どものイメージで制作してみてください」と調査者が提示した。協力が制作している最中には、調査者は使用した砂やミニチュア、その配置順序、および制作時間を筆記にて記録にとった。

(2) 半構造化面接

半構造化面接では、はじめに協力者と調査者が共に箱庭を囲むように立居で眺めながら、調査者が「どんなものができましたか」と質問をし、箱庭作品の全体像を明らかにするような面接を行った。その際、調査者は上記質問以外は協力者の語りに身をまかせるように聞いていくことで、箱庭内に表現された“子どものイメージ”にまつわるテーマを明らかにしようとした。次に、箱庭の側に用意した机と椅子に協力者と調査者が対面する形で座り、職務歴を聞いた後、「子どものイメージと聞いてまず思い浮かんだこと」、「どのようにミニチュアを選んでいったか」、「制作終了後に出来上がったものを

どのように思うか」「仕事で関わる子どものイメージとつながるか」「自身の子どもの頃とはどうか」「(妊娠中の協力者のみ) お腹の子どものとはどうか」の質問事項を元に半構造化面接を行った。この時、面接方式として対面法を採用したのは、協力者の疲労感を軽減する目的および、箱庭に表現された“子どもイメージ”が協力者の体験のどこに重きを置いているのかに注目するために、制作した箱庭作品から一旦離れることが有効的に作用するのではないかと考えたためである。面接内容と箱庭作品は、協力者の了承を得て前者をICレコーダーに録音し、後者はデジタルカメラで撮影を行いデータとした。

v. 分析方法

(1) インタビューの分析

本研究では子どものケアを職務とする看護師・養護教諭の“子どもイメージ”を探索的に検討するために、木下(2003, 2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下M-GTA)を用いて分析を行った。M-GTAはデータをコンテキストでみていく基本特性をもつため、データに反映されている協力者の認識や行為、感情とそれらに関わる要因や条件などが、イメージとどのように関係しているのかを丁寧に検討していくことができると考えられた。

具体的には、インタビューデータを文字に起こし逐語化したものを元に、複数の概念を抽出、それら概念間の関係を検討した上で、類似する複数の概念からそれを包括するカテゴリーを生成した。また、生成したカテゴリーと概念の相互関係を検討し、それを結果図として示し、解釈的に文章にまとめて分析結果とした。

(2) 箱庭の分析

箱庭の作品自体から“子どもイメージ”を検討するため、河合(1969)を参考に、それぞれの協力者が使用したミニチュアを、「カテゴリー」「サブカテゴリー」「種類」に分類して集計、結果を表にまとめた。

(3) 事例の分析

協力者1名の作品制作過程を個別事例として記述することにより、箱庭が出来上がるまでの経過を追った分析を行った。

IV. 結果

1. インタビュー内容の分析結果

箱庭を媒介に語られた“子どもイメージ”の内容をM-GTAを用いて分析した結果、28の概念から2つのサブカテゴリーと、9つのカテゴリーが生成された。これらのカテゴリーとサブカテゴリー、概念から導かれたものを結果図に示し、以下ではそのあらましについて述べる。なお、本文ではカテゴリーは【】、サブカテゴリーは〈〉、概念は□で表す。

子どもは本来的に[未成熟な存在]であり、また、どの子どもも[成長する力]を持っているという点で、両者は【子どもの本来的特徴】を示している。この本来的特徴は、誰もが平等に持つものとして示されているのに対し、環境の影響を受けて左右される成長的側面も存在することから、[環境の影響を受ける成長可能性]がある。影響を及ぼす環境としては【成長促進的な環境】と【成長阻害的な環境】があり、前者では、[無条件の愛]や[見守り]が子どもの成長を促進する作用をもたらし、後者では[親の期待による管理]や[過保護]、[親の心理社会的問題]が成長を阻害する作用をもたらす。子どもはこのような相反する環境のどちらに置かれた場合でも、徐々に成長の過程をたどり、[承認・愛情欲求]や[無意識の取入れ]といった【内的な動き】を経験する。子どもの体験する内的な心の動きは、成長促進的な環境では適度に働き【子どもらしさの開花】をもたらす。子どもらしい様子としては、[枠に囚われない存在]や[自由な存在]であること、[空想世界]や[好奇心]を持つことが“子どもイメージ”として示された。逆に、成長阻害的な環境では、子どもの内的な心の動きは過度に働き【成長遅延状態】に陥ってしまう。成長遅延

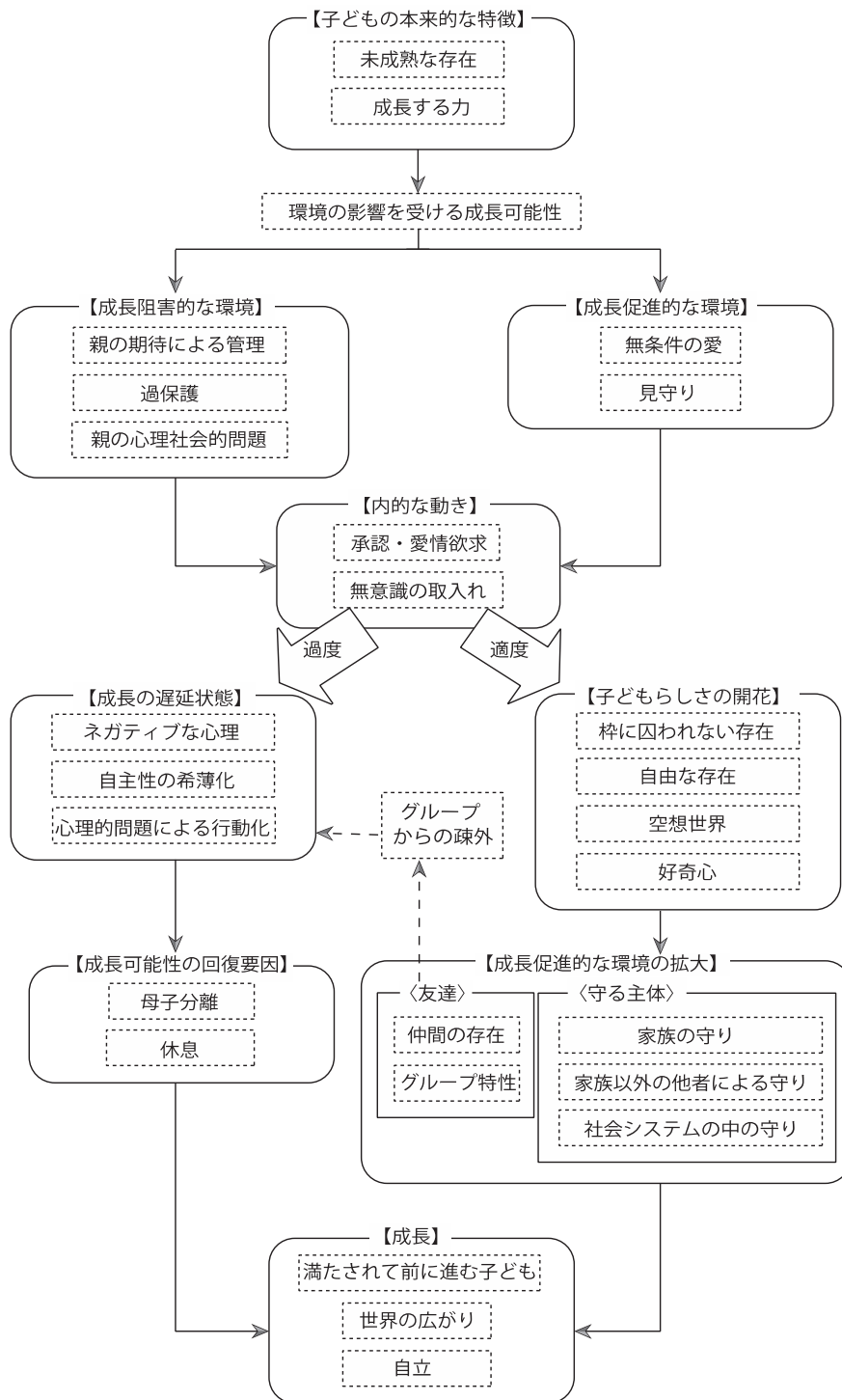


図1 箱庭を媒介にして語られた“子どもイメージ”結果図

の特徴としては[ネガティブな心理]を抱えたり、[自主性の希薄化]や、[心理的問題による行動化]が引き起こされたりする様子が示された。そして、子どもの成長を促す環境は、その成長に伴い【成長促進的な環境の拡大】をする。ここでは〈守る主体〉が[家族の守り]だけでなく[家族以外の他者による守り]や[社会システムの中の守り]へ広がっていく様子が示されている。また、〈友達〉関係の中で[仲間の存在]や[グループ特性]を認識することでさらなる成長へと繋がっていく。しかし、[グループからの疎外]を体験すると、心の問題を抱えることにつながりかねず、成長の遅延状態を引き起こす可能性がある。一方で、成長遅延状態からの回復を意味する【成長可能性の回復要因】も示され、回復のためには[母子分離]や、時に[休息]をすることも必要になる。そうすることにより、上記両者の環境から子どもが【成長】を遂げる、[満たされて前に進む子ども]や[世界の広がり]、[自立]のイメージが、“子どもイメージ”として示された。

2. 箱庭作品の分析結果

“子どもイメージ”で制作された箱庭作品について、使用されたミニチュア玩具の数量を「カテゴリー」「サブカテゴリー」「種類」別に集計したところ、以下のような傾向が示された。使用されたミニチュアの全数量は、協力者13名で498個、平均にすると38個であったが、最小使用数6個から最大使用数70個と協力者間の差が大きいため、ここでは目安としての提示のみとする。

カテゴリー「人」「動物」「自然」「乗り物」「建物」「人工物」の6群において、使用した人数が最も多かったのは、「人」と「自然」で、13名中12名であった。次いで「動物」、「建物」、「人工物」、「乗り物」の順に多い結果となっている(表1)。

サブカテゴリーの26群において、使用した人数が最も多かったのは、「木」で、13名中11

名であった。次いで「大人」と「哺乳類」が10名、「建物(公共)」「草花畑」「住居」が8名、「キャラクター」「職業人」「鳥類」「人工物(公共)」「爬虫類」が7名で半数以上に使用されていた。以降は表に示した通りである(表2)。

ここでは表の提示はしないが、種類の122種において、使用した人数が最も多かったのは、「木(中)」「店」「カメ」で、7名であった。次いで「花(小)」「男性」「家」「学校」「木(大)」「アヒルの親子」が6名で、おおよそ半数の協力者に使用されていた。

加えて、それぞれの協力者が一番初めに箱庭に置いた(表現した)ものを集計したところ、カテゴリー「自然」に属する、サブカテゴリー「木」「草花畑」「水の表現」が8名と使用人数が多い結果であった。

以上から、カテゴリーだけを見ると僅かな差はあれ、比較的全体的にミニチュアの種類が使用されているということが分かる。しかし、“子どもイメージ”で箱庭制作を依頼された協力者の半数以上が、まず初めに「自然」のミニチュアを手にとっていること、加えて、サブカテゴリーと種類においては「木」の使用人数が最も多く、具体的な内容を見ていく必要があると思われた。また、「人」と「動物」というのも協力者の多くに利用されていることから、以下では上位3位に含まれる「人」「動物」「自然」に絞って詳細な分析を加えた。

まず、カテゴリー「人」の詳細を、「子ども

表1 カテゴリー別・玩具の使用人数順位

順位	カテゴリー	使用人数 (全13名中)
1位	人	12名
1位	自然	12名
3位	動物	11名
4位	建物	10名
5位	人工物	9名
6位	乗り物	5名

表2 サブカテゴリー別・玩具の使用人数順位

順位	サブカテゴリー	使用人数 (全13名中)	順位	サブカテゴリー	使用人数 (全13名中)
1位	木	11名	12位	水	6名
2位	哺乳類	10名	15位	虫類	5名
2位	大人	10名	16位	鉱物	4名
4位	建物(公共)	8名	16位	人工物(日用)	4名
4位	草花田	8名	16位	乗り物(陸)	4名
4位	住居	8名	19位	恐竜	3名
7位	キャラクター	7名	19位	両生類	3名
7位	職業人	7名	19位	人工物(宗教)	3名
7位	鳥類	7名	22位	魚介類	2名
7位	人工物(公共)	7名	22位	建物(その他)	2名
7位	爬虫類	7名	24位	乗り物(空)	1名
12位	子ども	6名	24位	乗り物(海)	1名
12位	動物(親子像)	6名	24位	食料品	1名

の表象」と「大人の表象」に分けてミニチュアの数量を使用数の多かった順に表へまとめた(表3)。その際、「恐怖」を表す「お化け」などのミニチュアは「他の表象」としてまとめた。なお、パーセンテージは「人」カテゴリー全体の玩具数に対する割合を示す。人のミニチュアは全体で123個が使用され、使用した人数は13名中12名であった。表象内容別に見ると、「子どもの表象」として使用されたミニチュアは56個で、カテゴリー「人」の46%を占めていた。最も多く使用されていたのは「兵隊」で、子どもが不良となつてつむ様子や、子ども同士でごっこ遊びをしている様子、群れを成して戦いながら進む様子が表現されていた。このことは「兵隊」が軍などの集団で動く様子および、攻撃性を合わせ持つ様子が、子ども集団のイメージに合致した結果であるように思われる。対して、大人の表象として使用されたミニチュア数は61個で、カテゴリー「人」の52%を占めていた。「他の表象」は、6個で5%を占める結果となり、全体でみると「大人の表象」が「子どもの表象」をやや上回る結果となった。

次に、カテゴリー「動物」の詳細を、協力者のインタビューから読み取ることができた表象

内容別に「子ども」「大人」「友人」「動物」「高揚感」に分けて数量をまとめた(表4)。「子ども」「大人」「友人」は、動物のミニチュアを人に見立てて使用していた擬人化群である。「動物」は子どもの好きな動物、および生活の中に溶け込んでいる動物の表現として使用され、「高揚感」は子どものワクワク感を表現するために使用されていた。また、「協力者自身が好きだから置いた」など自身の嗜好を示す者もいたため「制作者嗜好」の項目と、インタビューで語られていなかったものに関しては「不明」の項目を作成した。なお、パーセンテージは「動物」カテゴリー全体の玩具数に対する割合を示す。動物のミニチュアは、全体で163個が使用され、使用した人数は13名中11名であった。表象内容別に見ると、「子ども」として使用されていたミニチュアは97個で59%、「大人」が8個で5%、「友人」が9個で6%、「動物」が28個で18%、「高揚感」が2個で1%、「制作者嗜好」が7個で4%、「不明」が12個で7%であった。動物のミニチュアを「子ども」に見立てて使用する協力者が圧倒的に多い結果である。中でも「ペンギン」が最も多く、使用され方を見ると、みんなと一緒に安心感を得るよう

表3 人カテゴリーにおける表象別・玩具数の集計

		玩具合計	
人 (玩具数：123個) (使用人数：12名)	子どもの表象	兵隊	14
		擬人化くま	11
		男の子	8
		女の子	8
		少女	6
		少年	5
		赤ちゃん	1
		ベル	1
		ミッキーマウス	1
		ピノキオ	1
			56(46%)
	大人の表象	男性	12
		擬人化くま	8
		女性	6
		子どもを抱えた母	6
		お爺さん	5
		お婆さん	4
		子どもを連れた父	4
		妊婦	2
		郵便配達員	2
		神父	2
		看護師	2
		患者	2
		警察官	2
		コック	1
		医師	1
		ミッキーマウス	1
		ミニーマウス	1
	他の表象	ベル	1
		白雪姫	1
		ミッキーマウス	1
		お化け	1
鬼		1	
怪獣		1	
		6(5%)	
		123(100%)	

※%は人カテゴリーに対する割合を表す

表4 動物カテゴリーにおける表象別・玩具数の集計

		子ども	大人	友人	動物	高揚感	制作者嗜好	不明	玩具合計	
動物 (玩具合計：163個) (使用人数：11名)	ペンギン	14	2						16	
	ブタ	12			1				13	
	カメ	5		1	4		1		11	
	ウシ	8	1		1				10	
	ヒツジ	9							9	
	ライオン	6	3						9	
	サル	3		5					8	
	アヒル親子	1			1			5	7	
	カバ	4	1		1				6	
	カエル	4			2				6	
	ウサギ	4						1	5	
	イヌ	2			2			1	5	
	恐竜(小)	1			4				5	
	ウマ	3			1				4	
	ヘビ	3				1			4	
	オラウータン	1		2				1	4	
	ゾウ	1			2				3	
	カブトムシ	1			2				3	
	ネズミ親子	1						2	3	
	サカナ				2		1		3	
	パンダ	2							2	
	ハムスター	2							2	
	キリン	1	1						2	
	ネコ	1			1				2	
	コトリ	1			1				2	
	オットセイ	1					1		2	
	タカ	1						1	2	
	イルカ			1			1		2	
	カマキリ				1			1	2	
	クマ	1							1	
	ラクダ	1							1	
	カラス	1							1	
	アヒル	1							1	
クモ	1							1		
恐竜(大)				1				1		
恐竜(中)				1				1		
ワニ					1			1		
サメ						1		1		
エイ						1		1		
イカ						1		1		
全体合計		97	8	9	28	2	7	12	163	
		割合	59%	5%	6%	18%	1%	4%	7%	100%

※%は動物カテゴリーに対する割合を表す

な女子グループや、家族像などの集団を表すために利用されていた。ペンギンというのは群れで動く習性によって生存確率を上げる動物であり、このような習性が集団のイメージ喚起に繋がったようである。

最後に、カテゴリー「自然」において、インタビューの中で語られることが多かった「木」と「水」について、その内容に注目した。「木」は、ポジティブなイメージで使用されることが多く、使用した9名中7名が、子どもが守られていることの表現や、成長の表現、木陰など休息の場としての表現で用いていた。一方で、ネガティブなイメージには、道のりの険しさを表現するものが2名おり、箱庭内で、中・小程度の木をいくつも置く様子が見受けられた。「水」では、協力者の9名中3名が、自然感を含んだ環境の良さや、癒しなどのポジティブなイメージで用いていた。また、水が好きな様子や、流れるように欲求充足をしている様子、純粹さなどの子どもの特徴を表す者が2名いた。さらに、子どもとその親子が生きる上で欠かせない要素として「湧水」を使用する者もいた。ネガ

ティブなイメージとしては、「木」と同様に、進む道のりの険しさを表現する者や、溺れる可能性を思い浮かべて危険なイメージを重ねた者、さらに、登校よりも簡単に行動に移すことができる“遊び場”として表現する者がいた。

3. 事例分析結果

事例として取り上げる協力者Eは、職務歴8年目の養護教諭女性である。Eは看護師としてNICU（新生児集中治療室）で経験を積んだ後、養護教諭職務に就いた。箱庭制作当時は、女子中高一貫校の4年目で、養護教諭としては3校目の勤務である。ミニチュア配置の順序を記した箱庭作品を以下に示す。

Eは、“子どもイメージ”と聞いてまず最初に「可能性」という言葉がボンと浮かび、「いろんな可能性を秘めている」自然のミニチュアに目がいった。そして、大きな木を手に取り、箱庭の右上へ置く。この木は、砂でしっかりと埋められ、根がどんどんと広がる「どしっと」した空間を表現している。そして「ここが本来はどしっとした空間があるから、どんどん進ん



写真1 Eの箱庭

でいける、(中略)というのが子どもの本来持っている力なんじゃないかと。」と、子どもの本来の力、言い換えれば、秘められた可能性を象徴的に表していた。Eはこの本来の力のイメージに沿って、子どもの可能性が活かされる世界(右下世界)と、活かされない世界(左上世界)を対角線で分け、表現していく。木を置いた時には、「複雑な気持ち」で世界を「半々」にするイメージが湧いていたそうであるが、実際に思い浮かべていた子ども達は、過去に関わった子を背景に、現在関わっている子が影響したと言う。このことは「自分のイメージの中で、こう、大学時代とか先生に教えてもらったり、自分も色々な子達と関わって、仕事じゃなくて子ども達と関わってる時は、本当に可能性も。(中略)仕事をしてからも可能性はあるって信じてるけど、(中略)現実の子ども達のイメージっていうのが新たに付け足された感じかな、可能性以外の。」と語られ、箱庭内・左上世界が自身の職務経験とともに作られた「新たな概念」であると述べた。

木の後に選択されたミニチュアは、右下世界と左上世界を行き来するように置かれていく(写真の番号を参照のこと)。

右下世界の、大波やトンネル、壊れかけた橋は、子どもが進むのに勇気がいるような「険しい道」を表現しており、橋とトンネルの間に置かれた小さな花は、険しい道ににある「ちょっとした喜び」を意味しているのだそう。癒しのシンボルである海を形づくり、小休止用のベンチや、仲間としてイルカとカメを置く。こちら側が子どもの可能性が活かされる世界なのであるが、その様相が浮かび上がってきたのは、後に左下に置かれた、子どもを抱きかかえて横になる母親と、それを取り囲むように移動された小さな花の存在であった。この花には祝福の意が込められており「生まれた時は、何もしなくても無条件で愛されて可愛がってもらえる。で、この子は可能性があるって信じてもらえて、そういうのがあるから突き進んでいける。」と、子どもが愛され、その存在を認め

られることで、「安心感があるから、こう荒波も越えていけるし、こういうポロポロの橋も勇気がいる、けれど渡って行こうって思えるし、あとトンネルで真っ暗な所が続いても前を見て、先を見て、光が見えなくても歩いていけると思うから」と、子どもが自らの力で険しい道をも進んで行ける様子が語られていた。また、母親の位置する場所は「家的な感じ」であるが、「その先は自分で見つけていくような、(中略)これから先出会うものは自分で歩いていくから出会える」とも語られていた。つまり、左下の母親の存在は、困難な道を進むための“支え”であり、木の表す本来の可能性と相まって、子どもの進む道筋を照らしている、ということが言える。

一方で、この母親は、左上世界にも通じており“命の始まりの場”の象徴でもある。母親の前後で選択されたミニチュアは、時計や、立派な橋とそれを渡る兵士、大きな花や警察官などで、警察官で表された親が「子どもに花を持たせたい」と希望をもつことで、子どもの時間や進む道を管理している。子どもは兵士として橋を渡っているのであるが、こちら側は五感をフルでつかえない、「自然に目を向けられない環境」であり、可能性が活かされない「全部親が用意した世界」なのである。そして、兵士の間に置かれた小さな貝殻は、「大したことはないのに、すごい戦ってる。(中略)こんな小石とかだけなのに障害物、ちゃっちゃかこうやって(避けて)歩いていけるのに、なんかいちいち立ち止まっちゃって、時間に管理されて苦しくなって、なんかちっちゃい障害物もおっきく感じて。」と、子どもが小さな障害物でも目の前に立ちはだかると困惑する様子が表現されていた。つまり、親に管理された世界では、子どもは自主性を見失い、「本来何と向き合ったらいいんだろうって分からないまま」戦い進むことになる。子ども達の行先には、「向かう先は良い大学とか、良い会社とか、良い大学行って、良い会社に入って、が良い。そう言うのを親が求めちゃって。」と学校やビル、

マンションが置かれた。興味深いのは、兵士の前に障害物として置かれた貝殻を、説明では小石と述べており、この貝殻を置いた直後に、右下世界・海の中へ大きな石を置いたことである。この大きな石は「こっち（大波・壊れかけた橋・トンネル）通りたくないから、こっちを通るっていう選択肢があってもいいのかなあって。イルカに乗って、みたいな。」と語られたが、子どもの苦難を対比的に表現しているかのようである。

このように、右下世界と左上世界は子どもの本来的な可能性を生かすか生かさないかの相反する世界なのであるが、両者の世界は、柵など明らかな境界線はなく、繋がっていて「いつだって変えられる」関係にある。そのことは「常に隣合わせで、子ども達が今生きているのかなって。」と語られていた。Eは、一通りの説明を終えると「なんか、今子ども達のイメージが新たに生まれた。自分の中で」と述べた。

インタビューの最後には、箱庭作品にE自身が子どもの頃の体験も関係していると述べ、直接言われたわけではないが、両親の望む左上世界を察して「無意識的な圧」として感じ取っていた様子が語られた。この無意識的な圧はEを「しっかりしなきゃとか、なんかそういう自分で自分をガチガチに固めて」いく方向へと導いたようである。本研究の協力において、このような自身の体験は意識していなかったようであるが、Eにとって「片隅にずっとある」もので、「ああ、だからそういう子ども達が寄ってくるのかもね」とも語られていた。

V. 考 察

1. インタビューから得られた“子どもイメージ”

本研究では、職務的に子どものケアに携わる看護師・養護教諭を対象に、箱庭作品を媒介に語られた“子どもイメージ”についてM-GTAを用いて分析、検討した。

i. 子ども本来の特徴

図1の最上部に位置するのは、子どもが[未成熟な存在]であることや、どの子どもも[成長する力]を持っている、という【子どもの本来的な特徴】である。協力者は「やっぱり僕の中で最初砂を選択した場面でも、何て言うのかな、儂いイメージというか、やっぱりどうしても、自分だけじゃどうしようもできないと言うか。なんかさらさらしたイメージというか、サラって。」(L)と、人の子どもが[未成熟な存在]で生まれてくるが故に、子ども自身の力だけではどうにもしようがない事象があることを思い浮かべて、儂いイメージと重ね合わせていた。そして「やっぱりどうしても、助けが必要というのが、多分僕の中でもキーワードになったのかな。」(L)と、子どもへ手を差し伸べる必要性を感じていた。また、子どもは「なんかこう、大人と同じ行動をしないじゃないですか、あまり。出来ないと言うか、あんまり考えずに動いてるというのはあるのかなあと思うので。まあ周りが見えてないって言うのもあるのかもしれないんですけど。」(J)と、[未成熟な存在]である為に視野が狭かったり、経験を積んだ大人のような思考や行動ができなかったりする。それ故、危ないことへも恐怖なく興味を示してしまうイメージが「なんか子どもって危ないことも好きじゃない？そういうのもあるなあと思って、ちょっと闇じゃないけど、危ないところをちょっと表現したいなと思って、トンネル置いて暗い感じを。」(B)と語られていた。

[成長する力]では、箱庭内に置かれた木が大きく伸びていくイメージと、子どもの成長力を重ね合わせて象徴的に表現している協力者が多く「この木は、伸びて大きくなっていくイメージで、この木とか、この木とか、この木とか（他の木）、どれよりも大きい木にしたくて…」(C)や、「成長している様を緑で表現してみました。（中略）生命力的な。」(G)などと語られていた。また、「ポンって浮かんだ言葉は、可能性。子ども、だから木を置いたのかもしれない。可能性を秘めてるというか。最初

自然のものに目があって、他の作られたものには目がいかなかった。自然っていろんな可能性を秘めてるといえる。だから子どもイコール自然でイメージしたのかもしれない。」(E)と表現する協力者もあり、自らの人生の道を見つけていく力や、進んでいく力、広げていく力など、成長する力の発揮可能性を秘めている存在として認識していた。

以上からは、子どもは未成熟ではあるが、同時に、可能性を秘めている存在として認識されているということが言える。言い換えれば、未成熟さがどのような方向にも伸びていけるという成長の可能性を内包していると考えられ、子ども本来の特徴として表れたと推察される。

ii. 成長可能性を左右する環境要因

【子どもの本来的な特徴】は、誰もが平等に持つものとして示されているのに対して、環境の影響を受けて左右される成長の側面も存在することから、[環境の影響を受ける成長可能性]がある。ここでは、良い環境と悪い環境のどちらにも影響され得る子どもの様子が語られており、「まあ環境が悪いとすぐ枯れる。整えば、よく育つ、花が咲く。意外と脆い。強い日に照らされれば枯れてしまう。」(G)などと、木で表された子どもの成長力が、環境によって生い茂った木にも枯れた木にもなる様子として示されていた。また、「(箱庭の右下側、左上側の関係の説明で) だからやっぱりこう、ガシッて親に言われるとこっちになっちゃうし、自由に、自分の道は自分で作って行きなさいってなったら、こっちの方にも行けるし。」(E)や、「この木は、なんだろう、変わる、栄養によって育ち方が変わるの。で根っこはこう張ってるんだけど、こっち(左上)にどっぶり浸かったらこっちの栄養しかないから、やっぱイメージとしては成長が遅かったりとか。」(E)と、環境によって本来子どものもっている可能性の開花に差が出たり、遅れたりする様子も語られていた。

子どもの成長可能性に影響を及ぼす環境としては、【成長促進的な環境】と【成長阻害的な

環境】という両極の表現がなされ、前者では、[無条件の愛]や[見守り]が子どもの成長を促進する作用をもたらし、後者では[親の期待による管理]や[過保護]、[親の心理社会的問題]が成長を阻害する作用をもたらす。具体的に、[無条件の愛]では、「生まれてきた時は、何もしなくても無条件で愛されて可愛がってもらえる、でこの子は可能性があるって信じてもらえて」(E)と、子どもが生をうけた直後から無条件に愛される存在であるイメージが語られていた。また、「恐竜は最初、なんて言うんですかね、おっきな物を表現したくって、愛情、愛情を表現したかったんですよ、おっきな愛情を。(中略)お母さんお父さんのおっきな愛に包まれてる子ども達で置きたかった」(K)と、ミニチュアの大きさを両親の愛情と見立てる者もいた。[見守り]では、「やっぱりこう誰かの目とか、見守ってるところに子どもがいる」(B)や「子どもを中心に、皆こう、子どもに注目してる、みたいな。(中略)子どもを支えるというか、見ている人達を選んでみて」(H)と、子どもが視線を介して守られているイメージが表現されていた。

一方で、[親の期待による管理]では、「親の希望で、時間が管理されていて、カチカチカチカチ。意外と親がもう作っちゃってるんだよね、こういう橋とか、時計とか。そういう用意されてる道を…これはもう全部親が用意した世界で。」(E)と、親が子どもの時間や行動、道やその先の人生を管理している様子が示されていた。[過保護]では、「(子どもが保健室登校となっても)無断で休んじゃったりとかもあって、やっぱりお家からは出られない、じゃあ教員が迎えに行くって言っても、お家の人がそれはやめてください、家は安全な場所になりたいからって、お家の方にも言われちゃって、迎えにも行けなくて、だからあそこ(家)に入っちゃうと、あの人たちが出てきてくれるのを待つしなくて、強制的に行ったり、中に入ったりっていうのはちょっとできなかつたっていうのが、強く印象に残ってて。だから安心で安全基

地なんだけど、安全すぎちゃって、出てこれない時もある。」(C)と、本来子どもの為に行われるはずの守りによって、家から出られない事態が引き起こされている様子から、過度な守りと捉えられていた。子どもは、安全な家にいることで外見上守られてはいるが、本当の守りとして機能していない為に、外界への安心・安全感が得られなくなってしまうようである。[親の心理社会的問題]では、「お父さんお母さんとの関係性が悪いと、母子密着すぎるとかだと、学校いけなとか、グレちゃうとか、切っても切り離せないかなと。」(A)や、「親に養育能力がないとか、親も精神疾患でとか、やっぱり家庭的な要因がすごく強いっていうのは見てて思ってた、入院してる子に関しては。」(M)、「生活保護で、お家に引きこもってる子、親がいるけど、育児放棄されちゃって、他のお家にいる子。」(F)と、両親の関係性や、精神疾患、貧困など親の抱える心理的・社会的問題が、子どもにとって悪影響となり得る環境要因である為に、子どもは本来的な可能性を生かすことができない様子が語られていた。

以上から、子どもは周囲の影響を受けて成長していく存在として捉えられているが、成長可能性を左右する環境要因、特に親を中心とした家庭環境の悪影響が、“子どもイメージ”の一部になっていることが分かる。先行研究と比較すると、菅原(2017)は、高校生の“子どもイメージ”の中に“親から受ける影響”を見出しており、その中で“親の禁止”を概念として挙げている。しかし具体的には、飼いたかった犬を親から禁止された様子などが語られており、禁止された事実はあるが、子どもへの悪影響として取り上げられている訳ではない。また、小児看護学履修前の看護学生の“子どもイメージ”を自由記述式に捉えようとした伊藤(2006)の調査においても、子ども単独のイメージは肯定的・否定的側面から示されているのに対して、環境的側面のイメージは示されていなかった。さらに、質問紙によるその他の調査では、子どもを取り巻く環境を“子どもイメージ”の一部

として尺度化している先行研究はなく、質問紙では捉えきれないイメージが本調査で表現されたと考えられる。本研究で対象としている看護師や養護教諭は、子どもの両親と関わり家庭環境への働きかけを行うことが、それら環境が子どもに直に影響するという点で外すことのできない職務であり、イメージ喚起に繋がったと考えられる。協力者の中には「この仕事を始めてすぐの頃は、やっぱり子どもの、言わば子どもの相手をしていけばいいのかなっていうような、まあそれこそイメージがあったんですけど、やっぱり、必ず子どもの影っていうか後ろには、まあ親もいて、で関わる、お爺ちゃんとか、まあいろんな方が居て、やっぱり後ろにはいるなっていうのを、まあいい意味でもそうでもない意味でも色々感じることは多くて。」(J)と、初任の頃と現在を比較して語る者もいた。つまり、このような環境の悪影響は、実際に就業して見えてきた“子どもイメージ”の一部であると考えられ、このような職業に就いている者には少なからず理想と現実の落差に直面する経験があるようである。

iii. 子どもらしさの開花 対 成長の遅延

周囲の環境が促進的か阻害的かのどちらかの環境に置かれていたとしても、子どもは徐々に成長の過程をたどる。そしてその中で[承認・愛情欲求]や[無意識の取入れ]といった【内的な動き】を経験する。具体的には、[承認・愛情欲求]では、「やっぱり親に喜んでもらうために頑張ってる子達が多いんですよ、すごく。認めてもらいたいっていう、その気持ちのすごく強い子が多くて、まあ褒められたいとか、やっぱり頑張ったねって言ってもらいたいとか」(J)などと、子どもが親や周囲の大人から、認められたい、喜んでもらいたい、褒められたい、甘えたい、というような欲求を持つことが示されていた。概して、子どもはこのような欲求を抱くのであるが、親や周囲の大人の承認水準が高い時、および承認や愛情の不足傾向にある時は、子どもの欲求は高まる傾向にある。そ

のような様子も「愛着障害的なところがあるかなって思う子で、本当になんか離れる、人から離れるってことができなくて、大人にすごくすごくこう、かまっちゃかまっちゃ〜っていう感じの子で。」(C)と語られていた。また、[無意識の取り入れ]では、協力者自身が子どもの頃を思い返して「(親から)言われたわけじゃないよ、あんたはこういう風な道を進みなさいとか、こういう資格として看護師になりなさいとか、言われたわけじゃないけれど。…でもなんか無意識の圧はあったな、無意識的な圧はね。」(E)と語られ、親の価値観を無意識的に自分の中に取り入れている様子が示されていた。

また、子どもの体験する内的動きは、成長促進的な環境では適度に働き【子どもらしさの開花】をもたらす。開花する子どもらしい様子としては、[枠に囚われない存在]や[自由な存在]であること、[空想世界]や[好奇心]をもつことが示されていた。具体的に、[枠に囚われない存在]では、「子どもってなんか枠に囚われてない感じ?なんか大人だったら、なんか一つの視点とかテーマがあって、なんかそれに絞ってってイメージがあるけど、子どもってなんか、色んな視点があって、なんか経験がないっていうのもあるかもしれないけど、なんか一つのもの見ても、なんか自分とは全然違う考えがあったりとかしてるから、なんかガチャガチャはしてるけど、子どもの、枠に囚われてない逆に、イメージ。」(B)などと語られ、子どもが決まりきったもの見方や考え方をしていない様子が語られていた。大人の場合は既存の知識で補えるが、子どもは補う知識が少ない為に、逆に「囚われなさ」を感じることに繋がっているようである。[自由な存在]では、「自由な感じなんですよ、やりたいこと結構やってて(笑)。」(C)や「人間関係とかなんとかっていうよりも、自分の思ったこととか、好きなこととか、純粋に考えてるんじゃないかなって思ったから。」(H)など、子どもは周囲の環境に左右されず、気持ちの赴くままに何かを考えたり行動したりしている様子から、“自

由な感じ”という表現がなされていた。[空想世界]では、箱庭内に置かれた“城”区域を「まあ夢だからね、本当は到達し得ないんだろうけど、こう、自分の中で持ってるような。」(I)と説明するなど、子どもが独自の空想世界をもっているイメージが語られていた。[好奇心]では、「なんか何でも興味示すじゃん、このヘリコプター?本当は飛んでる感じで置いたんだけど。あと乗り物とかも好きだし、虫も好きだし。」(B)や「それぞれ好きなことが違うし、すごいそれに対して、なんか、なんだろう、熱中するっていうか。それだけじゃなくてすごい詳しくなったりとか、愛がすごいイメージがあるから。」(M)などと語られ、子どもは見慣れないものや珍しいものへの好奇心が強く、また、心惹かれたものに熱中するイメージが示されていた。

一方で、子どもの[承認・愛情欲求]や[無意識の取入れ]といった【内的な動き】が過度な場合には、【成長遅延状態】を引き起こす可能性も示されている。成長遅延の特徴としては[ネガティブな心理]を抱えたり、[自主性の希薄化]や、[心理的問題による行動化]が引き起こされたりする。具体的に、[ネガティブな心理]では、「どうしてもこう、上を目指しなさいっていう風に小さい頃から言われてきてる子達なので、なかなか自分に自信がない子が多いんですよ。」(J)と、親が期待する理想とのギャップによって自信を喪失する様子や、「(友人関係において)表は仲良くしているけど実は敵対心と言うか、悪口とかじゃないけど、女子は相手の悪口言ったりするし、実は比べちゃったとかりして…良いな、羨ましい反面、妬みとか僻みとか。」(A)と、子どもが友人関係の中で葛藤を抱えて苦悩する様子なども示されていた。[自主性の希薄化]では、「(親が)過度に期待をして、こうやれとか、過干渉、過干渉すぎて、(子どもは)何も選べない、みたいな。だから全部お母さんがこうしなさい、あしなさいって決めた子は、何も選べなかったりする。」(A)と、親が子どもに干渉的である

為に、子ども自身で考えて選択をしていくこと（自主性を発揮すること）ができない様子が示されていた。[心理的問題による行動化]では、「普段はこっち側で仲良くやってるんだけど、なんかあると一気にガッて、凶暴化…ものに当たったりとか、学校のもの壊してみたいな」(D)などと語られ、子どもが心理的問題を抱えることによって、引きこもりや、ゲーム依存、反社会的行動、自傷行為、破壊行動などの行動化を引き起こす様子が語られていた。さらに、[グループからの疎外]を体験することも、心の問題を抱えることにつながり、成長の遅延を引き起こす可能性がある。このことについては、現代特有のSNS上で孤立してしまう様子が「毎週のように、なんかLINEでハブられたって言って…一人でも例えばもうこの子がやっぱ嫌だって言ってこっちに降りてくと、仲間を増やしてきて攻撃する、みたいなのが多い」(D)や、女の子特有の「みんな一緒じゃなきゃいけないけど（小さな肌色ブタ）、違う子達がこう外れていくみたいなの（小さな黒色ブタ）。…仲間はずれみたいになっちゃって」(A)と語られ、グループにうまく溶け込めないために疎外されてしまう子どもが表現されていた。

以上から、菅原（2017）が報告した高校生の“子どもイメージ”と一致度が高く、普遍的で想起されやすいと考えられるイメージに“子どもらしさ”というものが挙げられる。本研究では、子どもらしい様子が想起される過程で、比較対象を大人とした子どもの未成熟さの魅力があるように思われた。協力者の中には、「私そういう見方してないな、みたいな感じで教えてくれたりだとか…子どもの視点って面白いなって」(B)と大人の決まり切った見方からの脱却や、視野を広げてくれる存在として子どもを認識している者もいた。また、好きなことに熱中し詳しくなる子ども達をイメージしていた協力者からは、その語りから、ある意味で尊敬の念というのを感じられた。このことから、協力者が子どもを一人の人間として敬意をもって接しているということが伺われ、子どものケア

に携わり続けようとする意欲に繋がっているということが考えられる。また、子どもは置かれた環境によっては、成長に向けてエネルギーを集中させることができず、成長の遅延につながる可能性というのでも協力者の多くに認識されている。子どもの心の動き、特にネガティブな方向への過度な動きや、後述の、【成長可能性の回復要因】についても“子どもイメージ”に入ってきていることから、職務的に子どものケアに関わる立場にある協力者は、子どもの葛藤場面などに対応することが多かったり、どのようにしたら子ども達の心や成長を支えることができるのか？を考えることが多かったりすると予測でき、菅原（2017）の結果との相違に繋がったと考えられる。

iv. 子どもを取り巻く環境の変化

子どもの成長を促す環境は、その成長に伴い【成長促進的な環境の拡大】をする。ここでは〈守る主体〉が子どもの行動範囲の広がりに伴い[家族の守り]だけでなく[家族以外の他者による守り]や[社会システムの中の守り]へ広がる様子が示されている。また、〈友達〉が成長促進的な環境に加わり、その中で[仲間の存在]や[グループ特性]を認識することでさらなる成長へと繋がっていく。

具体的に、[家族の守り]では、「あんまり一人で行動するっていうのを想定せずに作ったかな、必ず抱っこしてたりとか、近くにいたりとか、なんかそういう、親ありきみたいな感じで、作ってみようかな、と思ったんですけど。」(J)と、箱庭内で親子が共に居る様子を表現する協力者がおり、子どもが家庭や家族に守られている存在であることが示されていた。[家族以外の他者による守り]では、「家庭だけじゃどうにもならないと思うので、(中略)やっぱり人とのつながりは欲しいと思った」(J)などと、子どもは家族以外の他者からもつながることで守られる存在であることが示されていた。[社会システムの中の守り]では、「子ども達がその、在宅で生きていく上で、やっぱり必要に

なってくるのが行政だったりとか、そのまゝその関わり？で今看てるのが重症心身障害児なので、まゝ普通のまゝ学校、普通の子が行ってる学校もそうなんですけど、まゝ学校と先生との関わりとか、あとまゝ病院、あと生きていく上でなんかこう、あの…なんて言うんですかね、まゝ普通の子とかじゃないから車椅子とかだったりすると思うんで、そのなんて言うんだろう…なんて言うんですかね、外、買い物行くにしてもやっぱりバリアフリーとか、なんか必要だし、そうゆうなんか店サイドとの関わりじゃないけど、それも必要になってくるような感じだから、そのなんて言うんですかね、まゝ外との関わり？を意識してこっち（左）側を作って」（K）と、子どもは地域や社会システムの中でも守られている存在であるイメージが示されていた。ここでは、社会システムの具体例の一つに行政が挙げられており、子どもとその家族が行政とつながることで虐待などの防止になると考えているようである。この行政という明確な社会システムが挙げられたのは障害児看護職のみであったが、その他の協力者からは商店街や病院、駅などの地域が挙げられていた。

【仲間存在】では、「こういう仲間？仲間か、一緒にこう渡ってくれる仲間をちょっと動物で例えてみて。」（E）などと語られ、子どもが人生の道のりで時間を共有する仲間存在をもつことが示された。【グループ特性】では、子ども同士で作るグループには男女の違いで特性をもち、女の子は「ペンギンって皆本当におんなじような、模様とか色だったんで、なんかみんなと一緒に安心するタイプの子達。…所属感じゃないけど、女の子で。」（D）と、同じであることに所属感や安心感を持つ様子が、男の子は「向かい合うというか、みんな同じ方向見るような（サル・ライオン）、ボスとか、小学生でボスみたいなガキ大将が居て、一緒につるむ少年達みたいな。」（A）と、ボス的人物を中心につるむ・群れるようなイメージが示されていた。

一方で、成長遅延状態からの回復を意味する

【成長可能性の回復要因】も示され、回復のためには「やっぱりちょっとこう、母子分離していくとか、なんかそういうのは年齢に応じては必要なんじゃないかなあと。」（J）と、年齢に応じた【母子分離】の必要性や、「足りてなさそうだなって言う。休める場所？…なんか何も考えずに一人でポツンと座ってられるような木陰みたいのが、あればいいのになあと思って。SNSとかからも一切離れて。」（D）と、時に【休息】することの必要性も示されていた。

以上から、成長に伴い子どもを取り巻く環境が拡大する中で、子どもは継続的に守られていく。この守る存在としての認識というのは、守る主体が【家族】・【他者】・【社会システム】という3つの個別概念として生成されたことから、イメージが色濃く現れてきているということが言える。この点は、【家族の守り】が最も多いヴァリエーション数であったこと、次いで多かったのが【見守り】であったことも考慮し、注目をしたい。菅原（2017）によれば、高校生も「親から受ける加護」という、子どもが親から守られる存在であるイメージが示されたという。しかし、守りの要素はそれのみで、守る対象としての認識よりも、子どもの様子が如実に現れたイメージが多い。また、岡野（2003）は、幼稚園児母親が、子どもを多面的・複眼的にとらえてイメージする傾向にあることを示唆しているが、守る対象としての子どもイメージは見出されていない。よって、子どものケアを職務的に行っている者の“子どもイメージ”では、子どもを守ることを中心にイメージが喚起されているということが考えられる。先行研究と本研究とのこのような差異は、協力者の職業的体験によってイメージが形作られた結果であるように思われる。もちろん、子どものケアを職業として選択した時点で、牛澤・北島（1995）が述べているような「守ってあげたい」というイメージが強かったことも考えられる。しかし、体験によってイメージが変化するという結論を導き出した研究も多く（片川ら、2004；村上ら、2010；岡田、2006；内田ら、1993）、河合（1991）

の言う「極めて個人的な体験」の上にイメージが成り立つのであれば、職務を遂行している中で子どもが守られる様子や、子どもに対する自身の認識をイメージとして練り上げた結果であると捉えることができる。中でも協力者の多くが、職業的に子どもを守るべき対象として認識し、それを実践しようと日々子ども達と関わっているのではないだろうか。このことは、本論文の協力者に限らず、子どものケアに携わる職業人の多くが、子どもを守る対象として認識している可能性を示唆している。さらに、守りが達成されないような状況下においては、守る対象としての認識が規範的に働き、葛藤を引き起こす場面もあるのではないかと考えられる。

v. 本来の可能性に沿った成長へ

このように、本来的な成長可能性をもつ子どもは、成長促進的であれ、成長阻害的であれ、周囲の環境の中で独自の成長というものを遂げていく。図1の最下部に位置するのはそのような子どもが【成長】を遂げていくというイメージであり、具体的には[満たされて前に進む子ども]・[世界の広がり]・[自立]のイメージが示されていた。[満たされて前に進む子ども]では、「この子は可能性があるって信じてもらえて、そういうのがあるから突き進んでいける。」(E)など、子どもの欲求が満たされることで、子ども自身の力で前に進むことができる様子が語られていた。また、[世界の広がり]では、「勇気を持って出てきて橋を渡って外につながると、色々世界が開けてる感じのイメージで。」(C)と語られ、子どもは徐々に行動範囲が広がり、世界が広がっていく様子が示されていた。さらに、[自立]では、「最終的には今度は、なんか、どんどん自立してって、今度は自分がこういう見守る立場になっていくのかなっていう、徐々に徐々に」(L)と、子どもが自立へと進んでいく存在であるイメージが示されていた。

これらの【成長】を遂げていく具体的なイメージは、「みんながこうゆう風な感じだったらいい

のかなって」(M)のように協力者の願いとして語られる場面もあった。また「仕事内容が、子ども達の自立に向けた支援と相談、みたいな感じなので」(A)と語る看護職者もおり、協力者自身が子どもの自立を促す役割を担っている。このことから各々の協力者が、子ども一人一人の可能性に沿った成長を願い、目標とすることで目の前にいる子ども達と関わりを持っていることが予測され、最終的に成長を遂げていくというイメージに繋がったと考えられる。

2. 箱庭作品から得られた“子どもイメージ”

箱庭作品内で使用されたミニチュア玩具の数を「カテゴリー」「サブカテゴリー」「種類」別に集計、その結果を元に、子どものケアに携わる看護師・養護教諭の“子どもイメージ”について表現傾向から検討した。

光元(2001)は、ミニチュアへの投影について「様々なレベルの無意識が投影される」と述べており、意識に近いものはしばしば人間のパーツに投影され、意識から遠いものは動物や恐竜に投影されがちであるという。本調査では、人のミニチュアを使用する協力者がカテゴリー順位では1位、サブカテゴリー順位では2位と、上位を占めており、“子どもイメージ”の意識的な投影が、人のミニチュアに対して行われたということが考えられる。しかし、その使われ方を詳しく見てみると、人のミニチュアに対して子どもを直接投影したのはおおよそ半数(子どもの表象:46%)で、残りの半数は大人を投影しているということが分かる(大人の表象:50%)。このことは、光元(2001)の述べる、意識の上で認識されている“子どもイメージ”に大人像が組み込まれているということが考えられ、前節で述べた、協力者が子どもを取り巻く環境的側面を重要視していることの現れであるように思われる。つまり、“子どもイメージ”には大人という環境が含まれているということが言え、両親を含む周囲の大人の適度な態度と過度な態度という両極の表現が大人

のミニチュアでなされた結果であると推察される。

また、人のミニチュアでは、大人の投影が半数を占めているのに対して、動物のミニチュアでは子どもを投影している協力者が59%と圧倒的に多い。岡田(1984)は、「動物が衝動的、本能的なものを示すと考えるなら、動物が使用されるのは、本能的なものが表面に現れてきているためかもしれない。」と述べており、動物のミニチュアが、本能的なものを示し、活動性、生命力などをも示すことに触れている。また、木村(2019)は、「箱庭における多数の動物の使用は必ずしも本能的な側面ばかりでなく、感情表出の自由さ、フィーリングの子どもっぽさといった側面とも関係すると考えられる。」と動物のミニチュアを使用することについてロールシャッハ・テストとの比較から言及している。ここで注意したいのは、岡田(1984)と木村(2019)の調査では、箱庭の自由制作において上記の考えを述べているということである。つまり、箱庭制作者が自由に箱庭表現を行った時、制作者自身の本能的なもの、活動性、生命力、感情表出の自由さ、フィーリングの子どもっぽさ、などが箱庭に現れてきていると捉えている。本研究では、箱庭の自由制作ではなく、“子どもイメージ”で制作を依頼した。よって、協力者の“子どもイメージ”における動物のミニチュアについて、を検討しているのであるが、そもそもの動物の本能的な様子と、“子どもイメージ”とが重なった結果、子どもの表象として多くの動物のミニチュアが使用された、と捉えられるのではないだろうか。協力者は語りの中で、子どもについて「すごいガチャガチャ遊んで、笑ってて」(B)、「自由な感じなんですよ、やりたいこと結構やってて」(C)、「なんか好きなことやってるなっていう、イメージ」(D)、「自分の思ったこととか、好きなこととか、純粹に考えてるんじゃないかなって」(H)、「動きが読めないじゃないですか、子ども結構」(J)、「子どもの頃って自分の人生を全うするというか、なんか、我が道

を行くじゃないけど」(L)などと表現しており、子どもの活動性の高さ、生命力の強さ、感情表出の自由さなどの子どもの本質的な特徴が、動物の本能的な様子と重なった結果であるように思われる。

さらに、13名中8名が、一番初めに置いた自然のミニチュアでは、カテゴリー順位1位、サブカテゴリー順位1位と、上位を占めており、初めに置かなくとも協力者の多くに利用されている。特に、インタビュー内で語られることが多かった「木」では、子どもが守られているというニュアンス、成長というニュアンス、休息というニュアンスで置かれることが多かった。木は建物の材木や薪となって、保護し養うという要素を含んでいる。また、力動的な生・死・新たな成長を表すものでもある。本研究では、このような木の本質的なイメージに、“子どもイメージ”の「守り」「成長」「休息」という要素が重なり具現化したものであるように思われた。また、水は、絶えず形や性質を変え、あらゆる生の源となるもので、雨や雪にもなれば、荒れ狂う急流にも穏やかな湖にもなる。流れていたり、淀んでいたり、荒れ狂っていたり、深かったりと様々な状態をみせ、それぞれ独自の象徴体系をもつ。本研究でも、協力者によってその表現方法は様々で、子どもの流動的な欲求充足過程や水が好きな様子、純粹さなど、子どもの特徴として表現した者、環境の良さとして表現した者、生命に欠かせない水として用いた者、険しい道のりや危険な場としての表現した者、など様々であった。

3. 事例を通して

事例分析結果で取り上げた研究協力者Eの箱庭作品について、制作およびインタビューの過程からイメージ調査における箱庭の有用性を検討した。

Eは、“子どもイメージ”で箱庭制作を依頼され、まず最初に「可能性」という言葉が思い浮かんだ。そして「可能性を秘めた」自然のミ

ミニチュアに目がいき、大きな木を選択する。この箱庭にとって何よりも重要なのは、この木を置いたとき、Eの中で世界を「半々」にする、というイメージが湧き起こったことである。木は、Eが過去から現在までに子どもと関わった体験を想起するきっかけとなり、それを箱庭内に配置することで、イメージの多層性の中から“子どもイメージ”が湧き起こったのだ。後のインタビューでは、学生時代に子どもとの非職務的な関わりをもった体験から、子どもの「可能性」というものを意識していたことが語られたが、職務経験を積んだことで「仕事をしてからも可能性はあるって信じてるけど、(中略)現実の子ども達のイメージってというのが新たに付け足された感じかな、可能性以外の」と、新たなイメージ(概念)が生まれたことを述べている。河合(1991)によれば、箱庭は意識的なコントロールによって表面的に制作されることも可能であるが、心の深い層が関連してくると、自分でも思いがけないものを作ったりするという。Eからは、思いがけない作品が出来上がったとの語りは聞かれなかったものの、子どもの可能性が生かされる世界と、生かされない世界という「半々」のイメージは、「複雑な気持ち」という情緒体験を伴い、意識的な概念操作の及ばぬところから浮かび上がってきた、ということが言える。

また、木を置いた後のEは、右下世界と左上世界を行き来するようにミニチュアを選択しており、小さな花など一度置いたものを移動させる場面も見受けられた。この小さな花というのは、子どもを抱きかかえて横になる母親を取り囲むように移動されたのであるが、それ以前は別の場所に置かれていた。つまり、花に込められた「祝福の意」というのは、移動をもって明確になったということが言える。東山(1994)は箱庭療法の特徴として、「自分にぴったりしたものしか置くことができない性質がある」と述べており、これに関連して、河合(2017)も、「そう簡単に何かに置き換えることができない」その人固有の表現可能性を秘めていることに触

れている。制作過程の様子からは、沸き起こったイメージとミニチュアのピッタリ感や、ミニチュアと箱庭内特定位置へのぴったり感があったと考えられ、この感覚の連続によってイメージが深まり、作品が作り上げられたということが予測される。

さらに、田嶋(1992)は、イメージの特徴として、「多義的で曖昧である」ことを挙げており、曖昧な、言葉になる以前のものの表現に適していることに触れている。岡田(1984)は、「言葉で示し得ないことを作品によってイメージとして示すとともに、作品を視覚で捉えることによって意識化が可能になり得る」と述べており、Eが箱庭の説明をするうちに、「なんか、今子ども達のイメージが新たに生まれた。自分の中で」と、作品によって明確化され「新たに生まれた」イメージをE自身が実感している。また、インタビューの最後で心の「片隅にずっとある」自身の子どもの頃の体験を思い起こし、箱庭とのつながりを示唆したことや、現在関わっている子ども達とこのようなE自身の体験とのつながりが「ああ、だからそういう子ども達が寄ってくるのかもね」と示唆されたことは、まさに箱庭を制作したことによる、イメージの意識化であると捉えることができる。

以上から、Eの事例では箱庭を置いたことでイメージが湧き起こるとともに、子どもに対する多岐に渡るイメージが表されたと言える。多岐とはつまり、Eが過去から現在までの経験によって抱いた“子どもイメージ”が箱庭内に統合された形で表れたということである。このことは岡田(1984)のイメージが変化し続けるものであるという主張に裏付けられるが、筆者はイメージ変容の過程にE自身の葛藤が含まれているように思う。Eは大学生時代に「子どもの可能性」を意識していたが、職務に就いてその可能性が「生かされている」か「生かされていない」かの現実を目の当たりにした。おそらくE自身は「子どもの可能性」を信じていたであろうが、子どもを取り巻く環境の否定的な側面という現実を目の当たりにすることで、少な

からずストレスやジレンマを抱えていたのではないだろうか。ここにイメージが変化する要因となった葛藤があるように思われる。村上ら(2010)や三島(2007)は、否定的なイメージを抱くことが、子どもを全体的・多面的にとらえることにつながることに触れているが、E自身も子ども単体のイメージから、環境を含めた全体的・多面的イメージへ変化を遂げた故の箱庭作品であったと捉えることができるであろう。また、E自身の子どもの頃の体験が“子どもイメージ”に関係しているというのは、箱庭の制作過程を語る中から生まれた洞察に近いものであり、インタビューのみでは決して聞けなかった“子どもイメージ”である。よって、箱庭制作を介したイメージ調査では、制作者の個人的・主観的なイメージがどのような経験や情緒体験を経て形作られているかを考察するのに有用であると言えるのではないだろうか。

最後に、今回、調査後に事例研究としてまとめたことで、調査者として箱庭制作を見守る態度というのも大変重要になってくると感じている。それは、協力者の言葉では語られなかった無意識的なイメージを、調査者が感覚として受け取る態度をもつことができれば、インタビューの内容に反映され、更なるイメージの深まりをもたらす可能性があると思われたからである。調査当日には思いつかなかったことが、今回の事例研究を通して色々と思いつき巡らされ、今更ながらに協力者に尋ねてみたいことが出てきた。例えば、子ども達の可能性が生かされる世界と生かされない世界の両者に置かれた石は、どちらも子どもの目の前に立ちただかる苦難として表現されているようであり、一方の世界では小さな石でもつまづいてしまいそうになりながら進む子ども像が浮かび上がり、もう一方の世界では、大きな石でも仲間と一緒に立ち向かって勇敢に乗り越えていく子ども像が浮か

んできた。また、子どもの可能性を生かす環境かそうでないかの2つの相反する世界が、明確な境界をもたずつながりのあるものとして「常に隣り合わせで、子ども達が今生きているのになって」と語られたことから、箱庭内を流動的に生きる子ども像が感じられた。しかし、箱庭の右上に置かれた木と、左下に置かれた子どもを抱えて横になる母親は、子どもの可能性が生かされる世界と生かされない世界のどちらへも通じていた。子ども達は環境に左右され、可能性が開花するかしないかの現実はあるが、しかしどの道を辿ったとしても生命の誕生と成長可能性という普遍の道筋の中にあるのである。このことは、制作者であるEの根底にある考え方、子どもの捉え方を表しているように思われ、まさに、研究協力当時のEの子ども観の根幹になるものであったと思われる。

VI. 今後の課題

本研究はあくまで探索的な研究であり、子どものケアに携わる職業人の“子どもイメージ”を捉えようと模索をしたものである。研究協力者は調査者の知人へ縁故法で募った為、協力者の偏りは否定できず、本研究で得られた結果を子どものケアを行う職業人に一般化することには限界がある。また、性差や細かい年齢層を意識した分析は行っておらず、性別による“子どもイメージ”の比較や、年齢による比較、さらに他の職業との比較も十分ではない。よって、一般化のためには上記を意識したより多くの調査が必要であると考えられる。加えて、本研究から“子どもイメージ”形成への関連が示唆された、協力者自身の生育環境や職場環境などを質問紙調査などで裏付けていくことも重要であると思われる。

引用文献

林田りか・中 淑子(2001). 認可外保育施設で働く保育者がもつ子どもに対するイメージの実

態. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 2巻, 65-72.

- 東山紘久 (1994). 箱庭療法の世界. 誠信書房.
- 古谷佳由理・内田雅代・兼松百合子・武田淳子・丸 光恵 (1995). 小児病棟実習前後における学生のこどもに対するイメージの変化について——受け持ち患児の年齢, 実習病院, 学生の不安・認識の違いより——. 千葉大学看護学部紀要, 17巻, 97-104.
- 石原 宏 (2015). 箱庭療法学モノグラム 第2巻 箱庭療法の治療的仕掛け——制作者の主観的体験から探る. 創元社
- 伊藤良子 (2006). 学生が小児学履修前に持っている子どもイメージ——自由記載レポート内容からの分析——. 市立名寄短期大学紀要, 39巻, 87-89.
- 伊藤葉子 (2005). 中・高校生の「子どもイメージ」の発達. 千葉大学教育学部紀要, 53巻, 85-90.
- 伊藤葉子・武藤八恵子 (1987). 保育領域における情意の指導と評価 (第2報) ——子どものイメージ——. 日本家庭科教育学会誌, 30巻1号, 67-72.
- 片川智子・金城やす子・小島洋子 (2004). 小児看護教育における学生の子どもに対するイメージの変化——2回の学内演習をとおして——. 静岡県立大学短期大学部教員特別研究報告書, 13.
- 河合隼雄 (1969). 箱庭療法入門. 誠信書房.
- 河合隼雄 (1991). イメージの心理学. 青土社.
- 河合隼雄 (2018). 無意識の構造 改版. 中公新書.
- 河合隼雄・中村雄二郎 (2017). 新・新装版 トボスの知. 株式会社CCCメディアハウス.
- 木村晴子 (2019). 創元アーカイブス 箱庭療法——基礎的研究と実践. 創元社.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂.
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA——実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリーアプローチのすべて——. 弘文堂.
- 三島知鷹 (2007). 教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容. 日本教育工学会論文誌, 31巻1号, 107-114.
- 光元和憲・田中千穂子・三木アヤ (2001). 体験箱庭療法Ⅱ. 山王出版.
- 本村良美・八代利香 (2010). 看護師のバーンアウトに関連する要因. 日本職業・災害医学会誌, 58巻3号, 120-127.
- 村上京子・田頭彩香・三澤真希・辻野久美子・沓脱小枝子 (2010). 看護学生の子どもイメージと形成要因——被養育体験・子どものかわりとの関連——. 看護教育研究, 51巻7号, 576-582.
- 岡田恵子 (2006). 医療保育学生の保育所実習前後の子どもイメージ, 心理社会的発達の変化とこれらの関連性. 川崎医療福祉学会誌, 16巻2号, 377-384.
- 岡田恵子・中新美保子・谷原政江 (2006). 医療保育学生と看護学科生における入学時の子どもイメージの比較. 川崎医療福祉学会誌, 16巻1号, 179-183.
- 岡田康伸 (1984). 箱庭療法の基礎. 誠信書房.
- 岡野雅子 (2003a). 青年期女子の子どもに対するイメージ——彼女たちを取り巻く人間関係と親準備性獲得の課題との関連——. 日本家庭科教育学会誌, 46巻1号, 3-13.
- 岡野雅子 (2003b). 子どもに対するイメージ——女子学生と幼稚園児母親との比較と保育教育への示唆——信州大学教育学部紀要, 110巻, 57-67.
- 奥平ナオミ (2002). 日本の箱庭とその歴史. 岡田康伸 (編). 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズ I 箱庭療法の現代的意義. 至文堂, pp. 33-51.
- 斎藤 眞 (2002). 治療的要因. 岡田康伸 (編). 現代のエスプリ別冊 箱庭療法シリーズ I 箱庭療法の現代的意義. 至文堂, pp. 121-134.
- 斉藤紫をん (1992). 不登校児の箱庭表現に関する数量的研究. 箱庭療法額研究, 5巻1号, 39-50.
- 菅原瑠夏 (2017). 高校生男女のカラージュ制作に表現される子どもイメージの探索的研究. 東京国際大学大学院臨床心理学研究科修士論文.
- 田嶋誠一 (1992). イメージ体験の心理学. 講談社.
- 高橋紀美子・谷原政江・酒井恒美 (1994). 看護科および保育科学生の抱く子どものイメージ——二・三の要因, 特に自我構造との関係——. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 1巻1号, 47-53.
- 田中信市 (2004). 箱庭療法——心が見えてくる方法. 講談社.
- 田中康裕 (2000). 分析心理学における錬金術のイメージと論理. 河合隼雄 (編). 講座 心理療法 第3巻 心理療法とイメージ. 岩波書店, 125-208.
- 田崎慎治・米沢 崇 (2013). 大学生の教師効力感と教師イメージ・子どもイメージに関する研究——広島大学教育学部フレンドシップ事業

への参加による変化の検討——. 学習開発研究, 6巻, 57-65.

内田雅代・古谷佳由里・兼松百合子・中村美保 (1993). 小児看護実習における学生のこどもに対するイメージの変化について. 千葉大学看護学部紀要, 15巻, 35-43.

牛澤美恵子・北島靖子 (1995). 小児看護実習における学生の子どもに対するイメージの変化と

その変化に影響を与える実習条件. 順天堂医療看護大学紀要, 6巻, 14-24.

山内朋子・筒井真優美・松尾美智子・伊藤孝子・西村美希子・西田志穂・長谷川考音・江本リナ・深谷基裕・中澤淳子・飯村直子 (2009). 小児看護領域で働く看護師のストレスや感情に関する文献検討. 日本小児看護学会誌, 18巻1号, 127-134.